



淫行に
及んでいる。





友人と呼べる
者はなかった。

僕には元々、



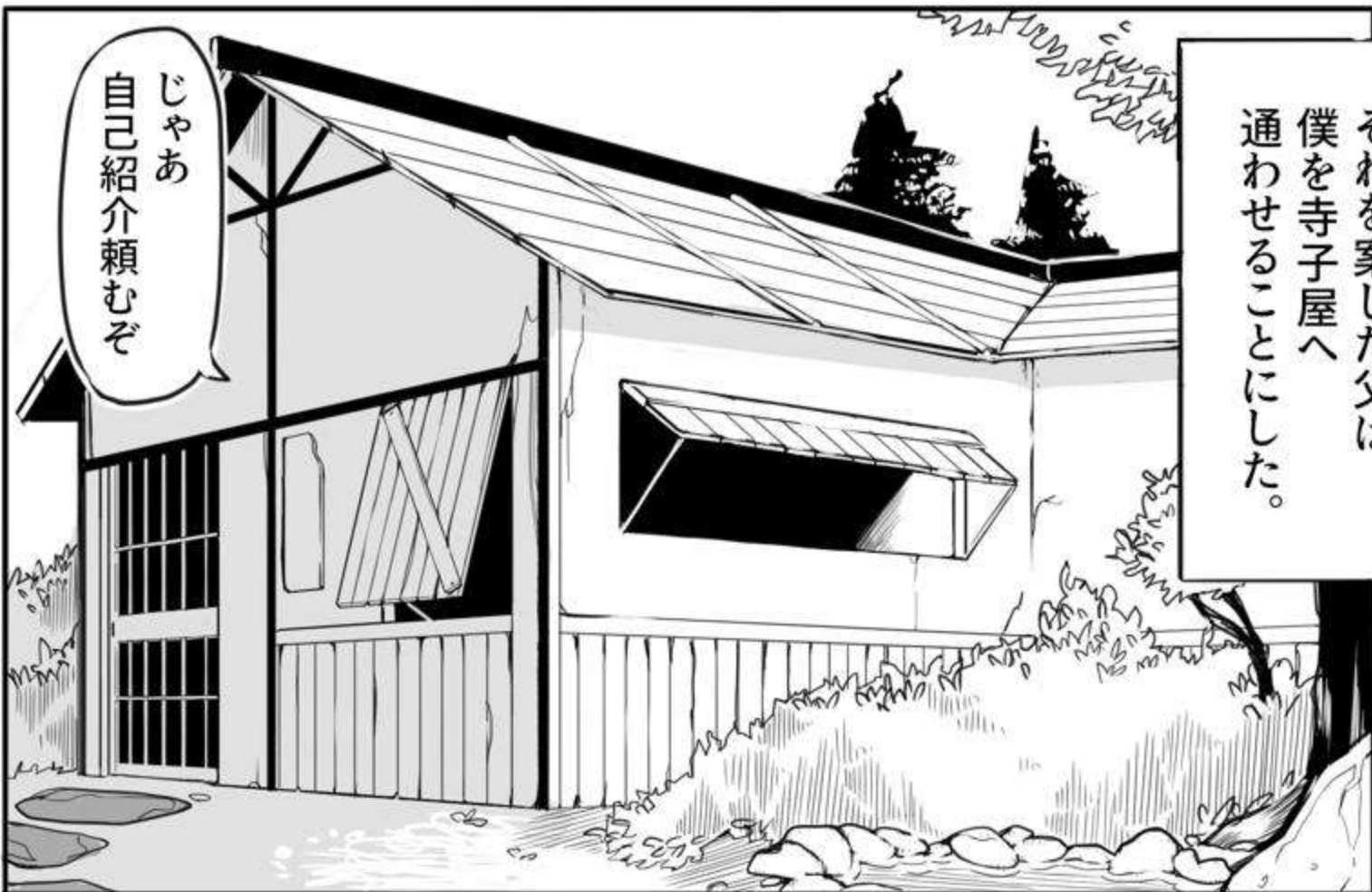
——経緯を
説明しよう。



自室に籠りがちで
あったためだろう。



僕が勉学を
好むあまり、



それを案じた父は、
僕を寺子屋へ
通わせることにした。



Umm...

じゃあ
自己紹介頼むぞ



諸田一太

自室に籠り、独り勉学に暮れるより、こちらの方が格段に健全である。

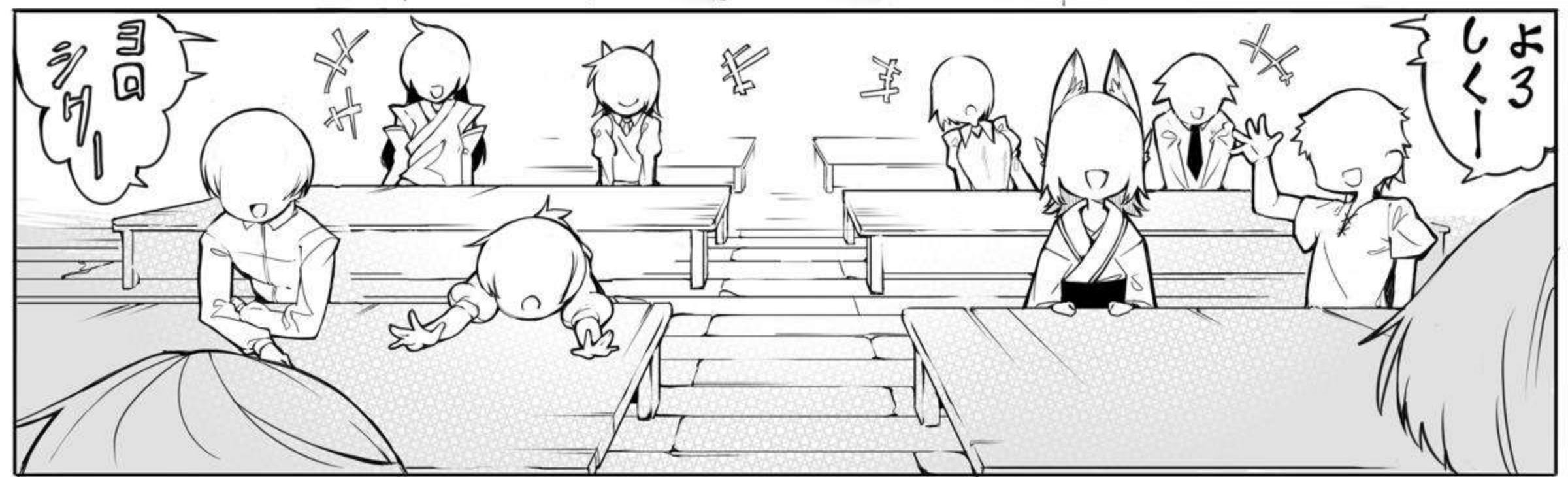
との考えらしい。

もろた いった
諸田一太です
よろしく…

カッ

カッ

カッ



ヨロシク

ヨロシク



慣れない環境に対し、僕は些か—
いや、非常に大きな不安を抱いていたが

みんな
仲良く頼むぞ

はい

机は一つに二人掛け
席は決まっていらないから
空いているトコに座ってくれ

ハイ
ハイ。



と…
隣いいかな…

空いてる
トコ
空いてる
トコ…

うーん



もちろん
もちろん

私はルーミア
よろしくね

ひらひら

可憐としか
形容できない
彼女によって、



その暗然とした心地は
いとも容易く払拭されて
しまったのである。

私はルーミアちゃんぞ
いーよ

うん

イッパ君って
呼んでるさ…

うん



よ…
よろしく…
ハアア

あっち
にはねー

ルーミアちゃんは
放課後に寺子屋の
中を案内してくれた。

ここは
物置

ガラ

あと
裏にはー

その間、僕は
ただただ彼女に見蕩れて
いた訳だがー

もう
なんだ...

私のこと
そんなに

好き？

ねえねえ

ん？？

え!!





おやおや
おやおや
おや〜

凶星なのかし？
そうなのかし？

え…と
その…
な…



た…
確かに
気になると
いうか…

げいぞ
それは



あんなジロジロ
見られてたら

そりゃ分かるよ
私の事気になる？

フーッ



ニヤ
ニヤ

じゃあ
こんなはどう？

え…？

意気地なしの僕は
一度はこの状況を
逃げ出したのだが、

なんというか…



それは…
その…友達として
…というか



友達は友達でも



なるって
いうの

男の子と女の子で
しかなれない友達に

この胸の欲望を容認して
くれると理解した途端に
狡猾で強欲な僕は、

…う

…うん

眼前の状況を
良しとして受け入れた。

あつら
誂えられた事柄
ばかりを享受する
その醜悪性を

見透かしたかの
ように晒い、

ゆる
赦すかの
ように微笑み、

彼女は
暗がりへと
手招いた。

そして僕は—

コイ
コイ

淡い闇の中へと
歩を進めたのだった。

トツ…



——かくて、
現在に至る。

ちゅっ
ちゅっ
ちゅっ

ん？



よかったー

きもちい...

うん...



すっきり
おつきく
なったね
きもちく
なってきた？

もう数分前から話を
始めなければ
ならないのか...

ああ、そうか...
彼女が「よかった。」と
笑ったその真意を
理解してもらうには





素敵だと思っし

ええええつちだなとも思っけど

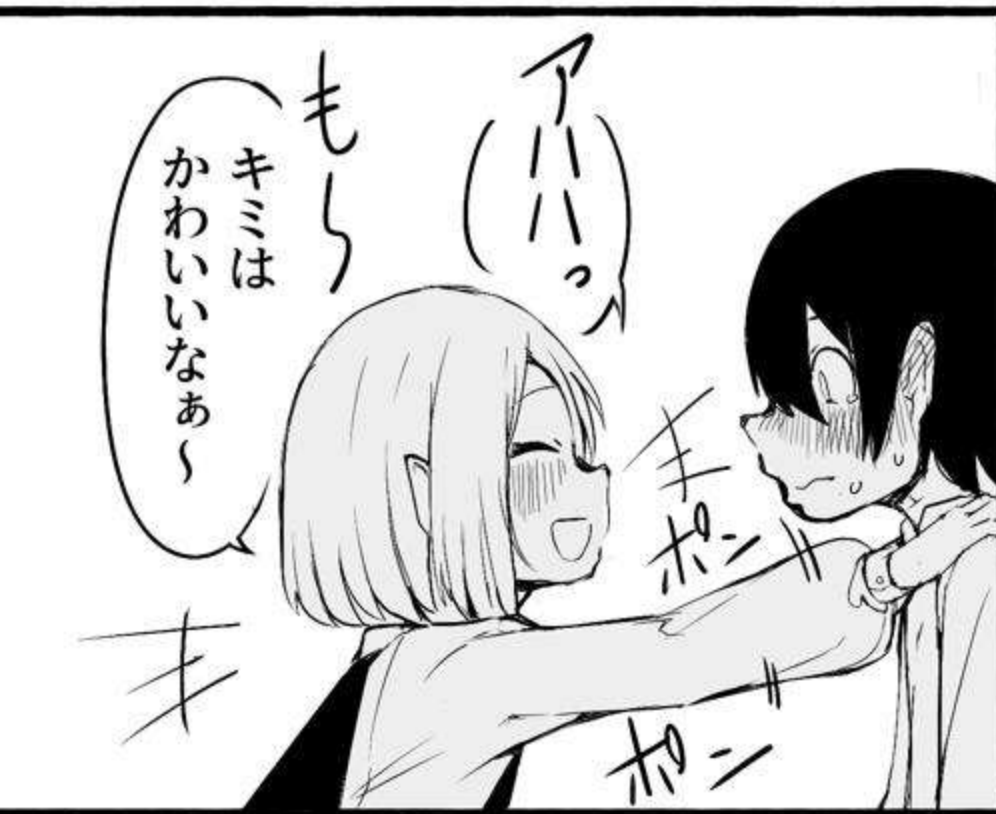
あーちやう!



ここ...これは違くて...ッ!

あのルーミアちゃんはすごくかわいいし

すす...すごく優しいし



もっとキミはかわいいなあ

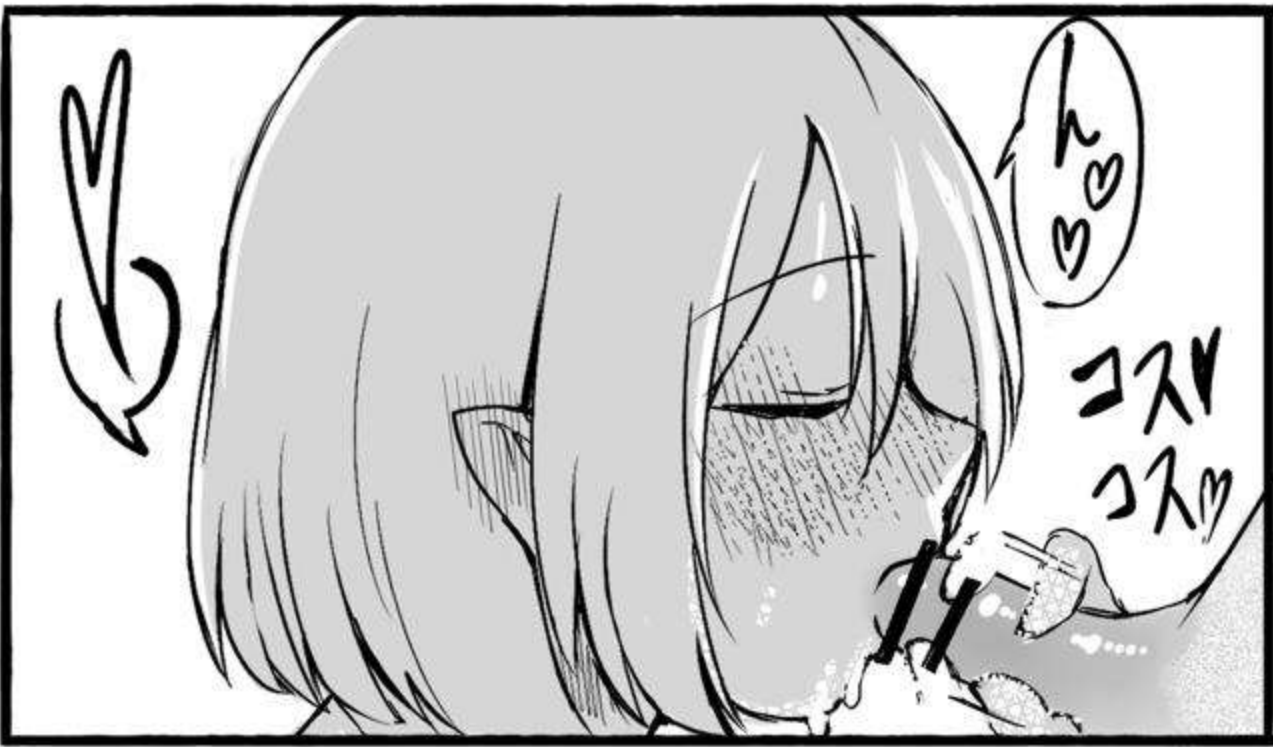
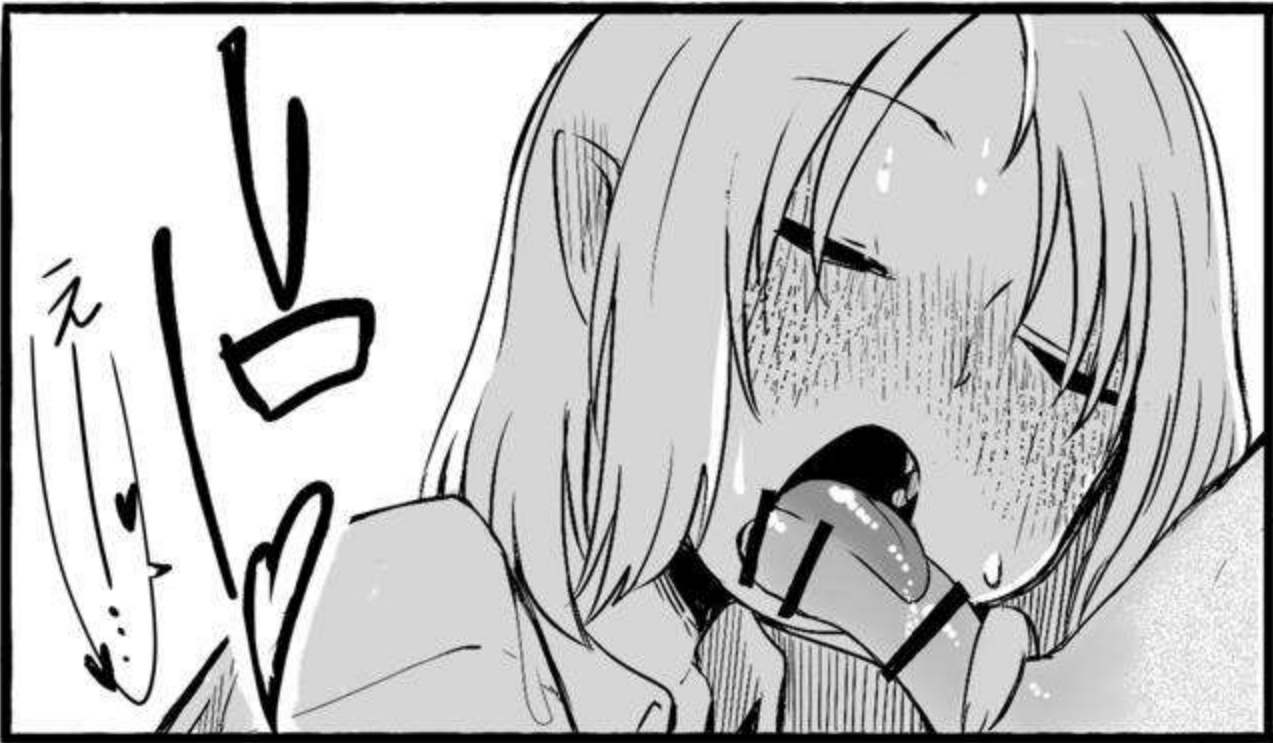
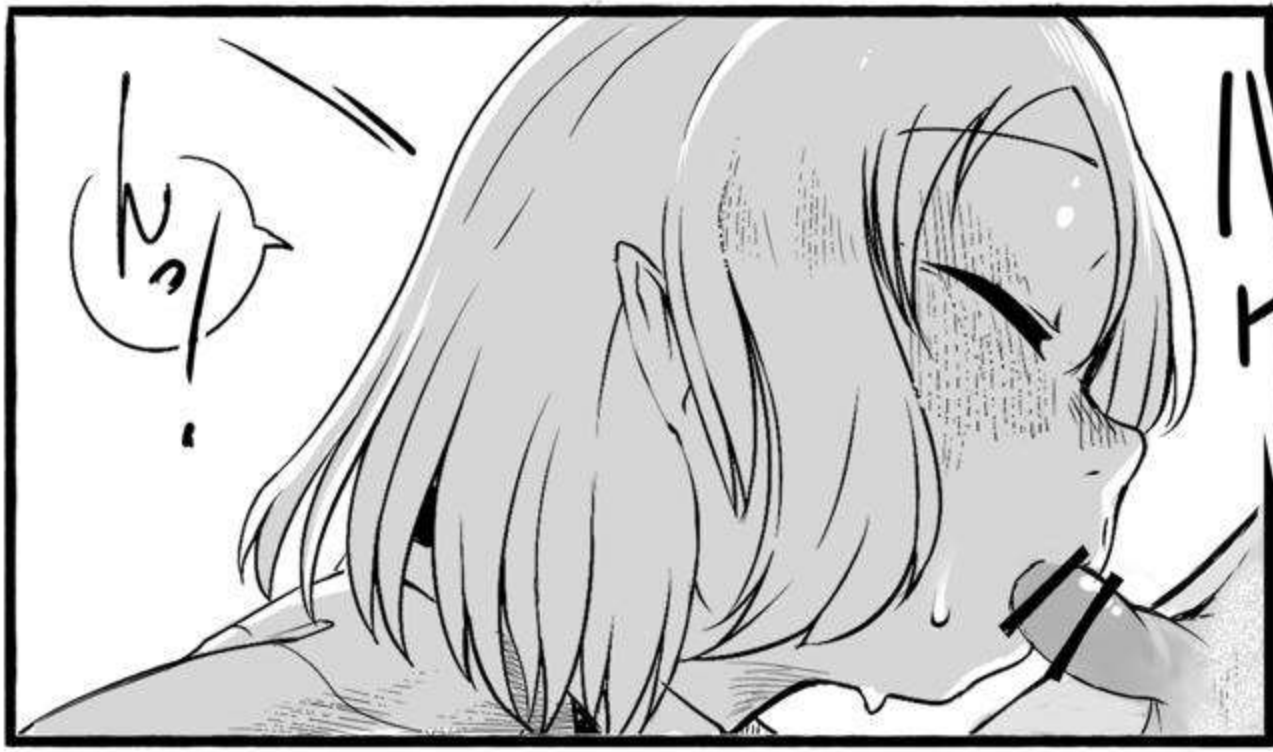


ととにかくルーミアちゃんに興奮してない訳ではなくってッ!



だいじょうぶだいじょうぶ

ちゃんと勃たせてあげるからさ



かくて、
現在に至る。

そうして
間もなく僕は、

ルーミア
ちゃん……
も……
出そう……

うん……

出して
出して

出して
出して

いっしょ
いっしょ

その温かく柔い
口内に射精した。

ドク……

あ……

いっしょ
いっしょ

いっしょ……

いっしょ
いっしょ
いっしょ
いっしょ
いっしょ
いっしょ

いっしょ

いっしょ

いっしょ

いっしょ

ちよー出たねえ
気持ち良かったんだね



どうやるか
わかる？

た…
多分…

パンツの
脱がせ方は？

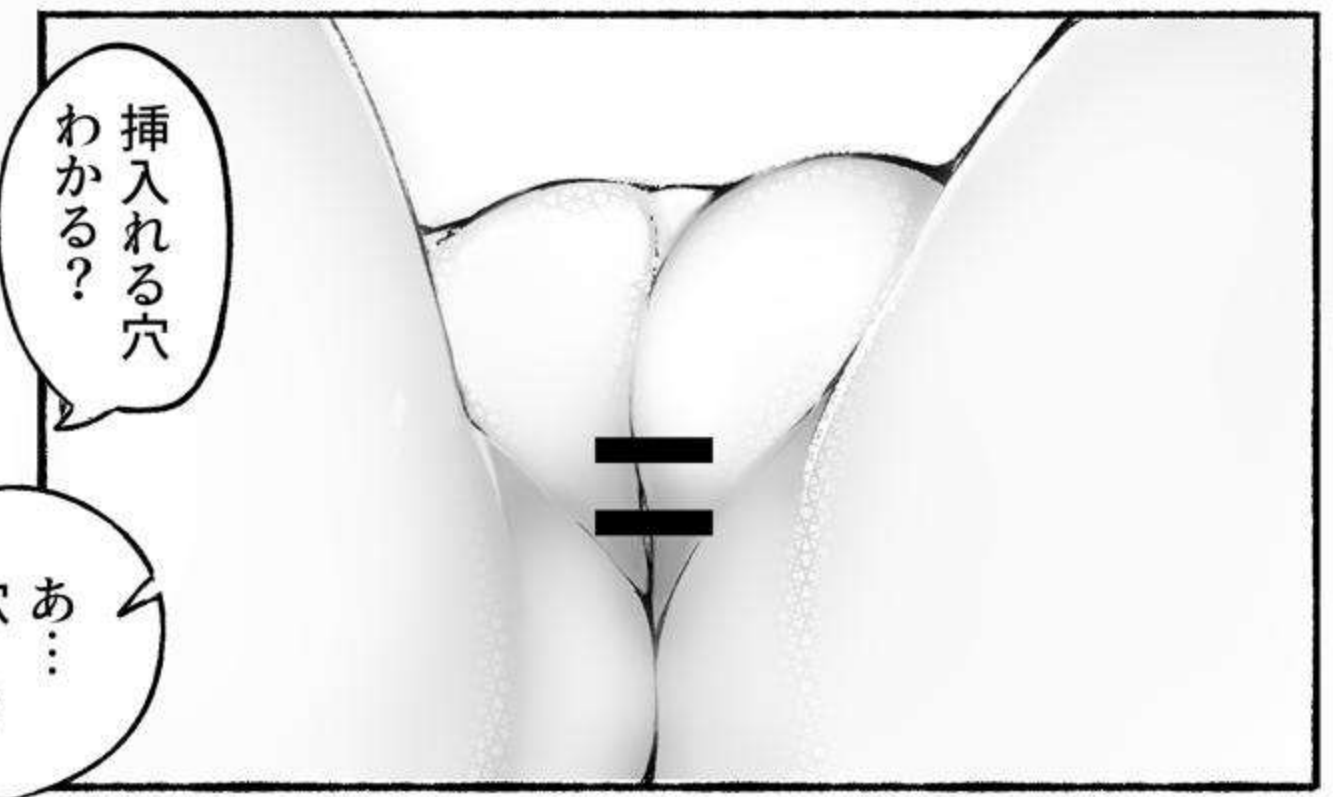
わかるよっ
…多分

ふぁーすとすてーじ
くりあ~~~~

はア
よくできましたア



指で
見てみて



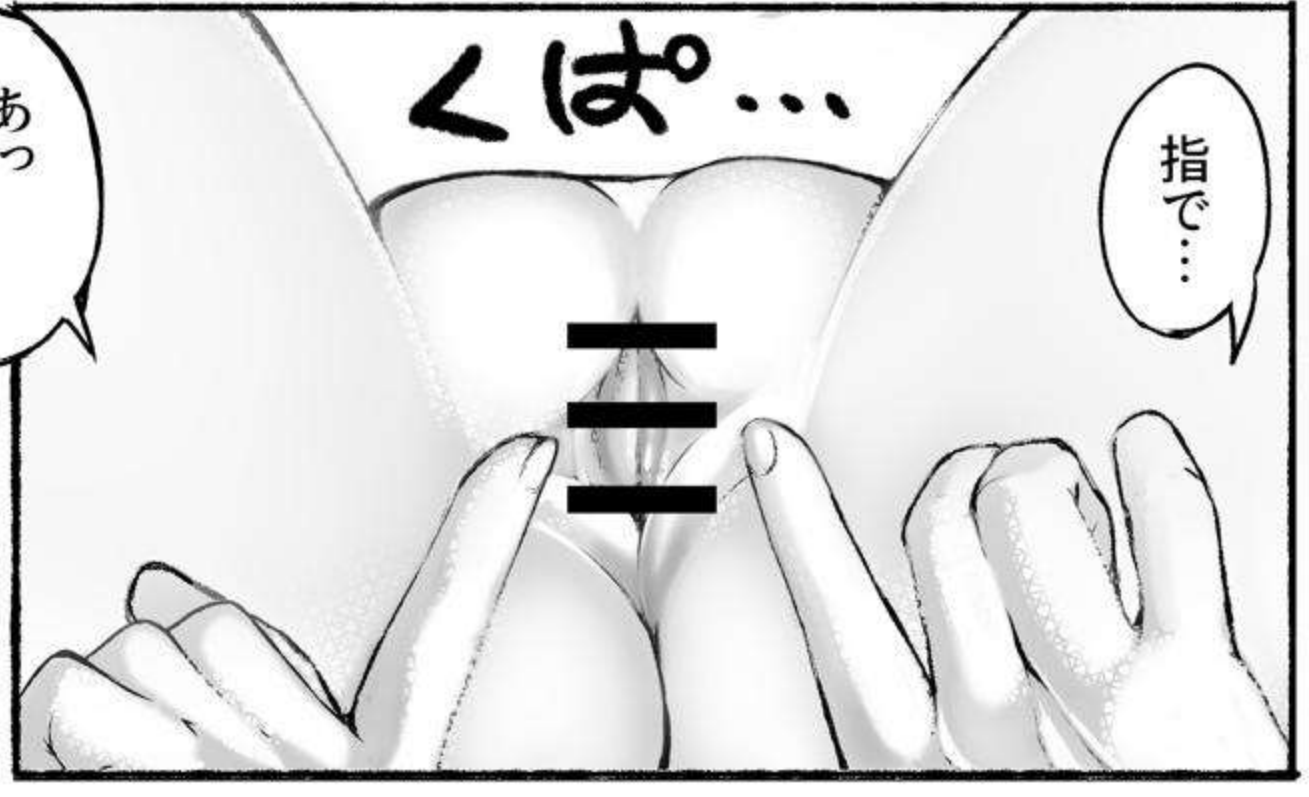
挿入れる穴
わかる？

あ…
穴…？



そう…
指挿入れてみて？

あっ
…これ？



指で…



もっと奥に
挿入れてみて…？

うん…いいよ…



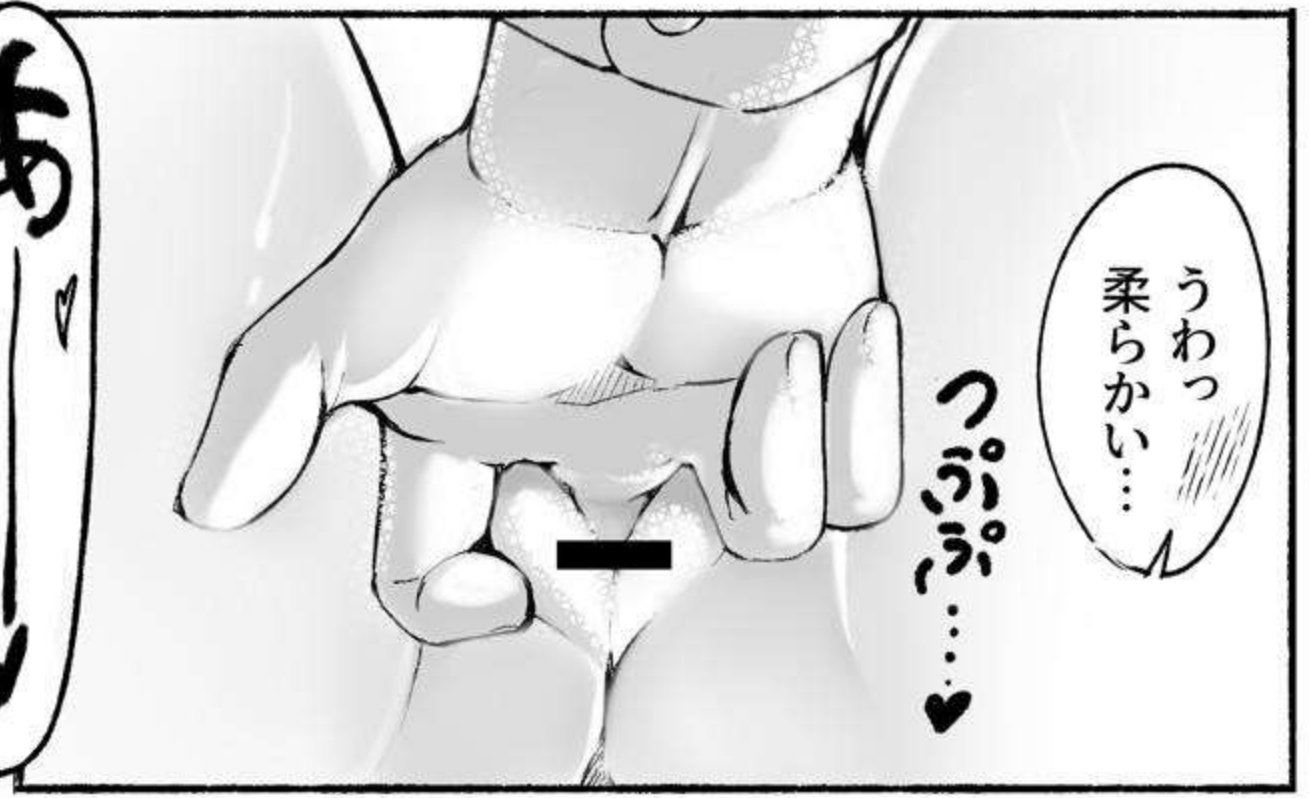
あ…

こう…？
あ…
あったかい…



そっ…
いい…

あ
あア…ツ



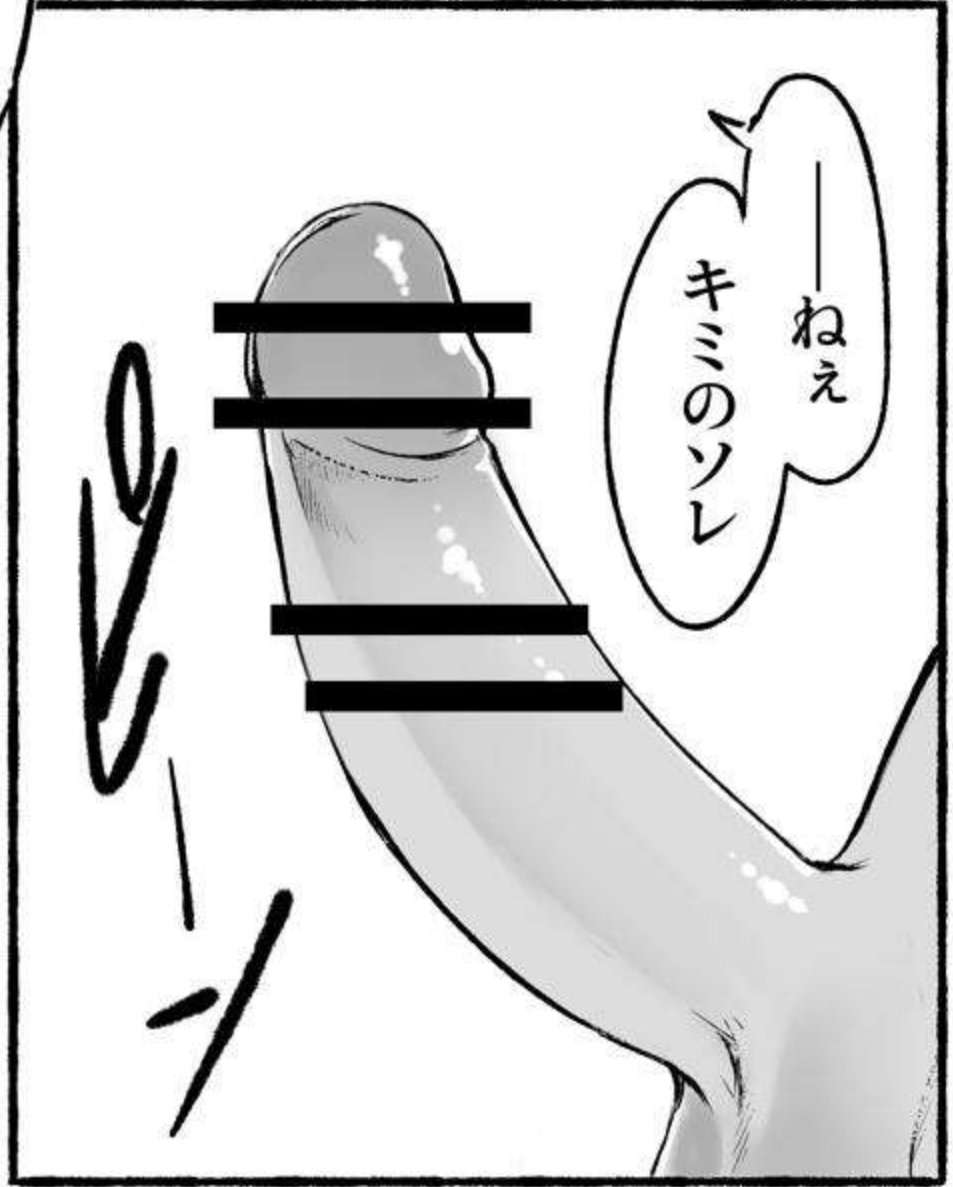
うわっ
柔らかい…

いこ...

うん



もう挿入れたくって
堪らないって感じだね



—ねえ
キミのソレ

「アホな女...」

...お前...



うん...

ほら
さっきの穴に
挿入れてごらん



きたっ...

スッ

ッ

あぁッ



うーんーん
ニク...

ぬ 131°...

初めて味わう
興奮だった



僕の性器が
膣壁を押しつけるのに合わせて
ルーミアちゃんは嬌声を上げた

ん...

あ

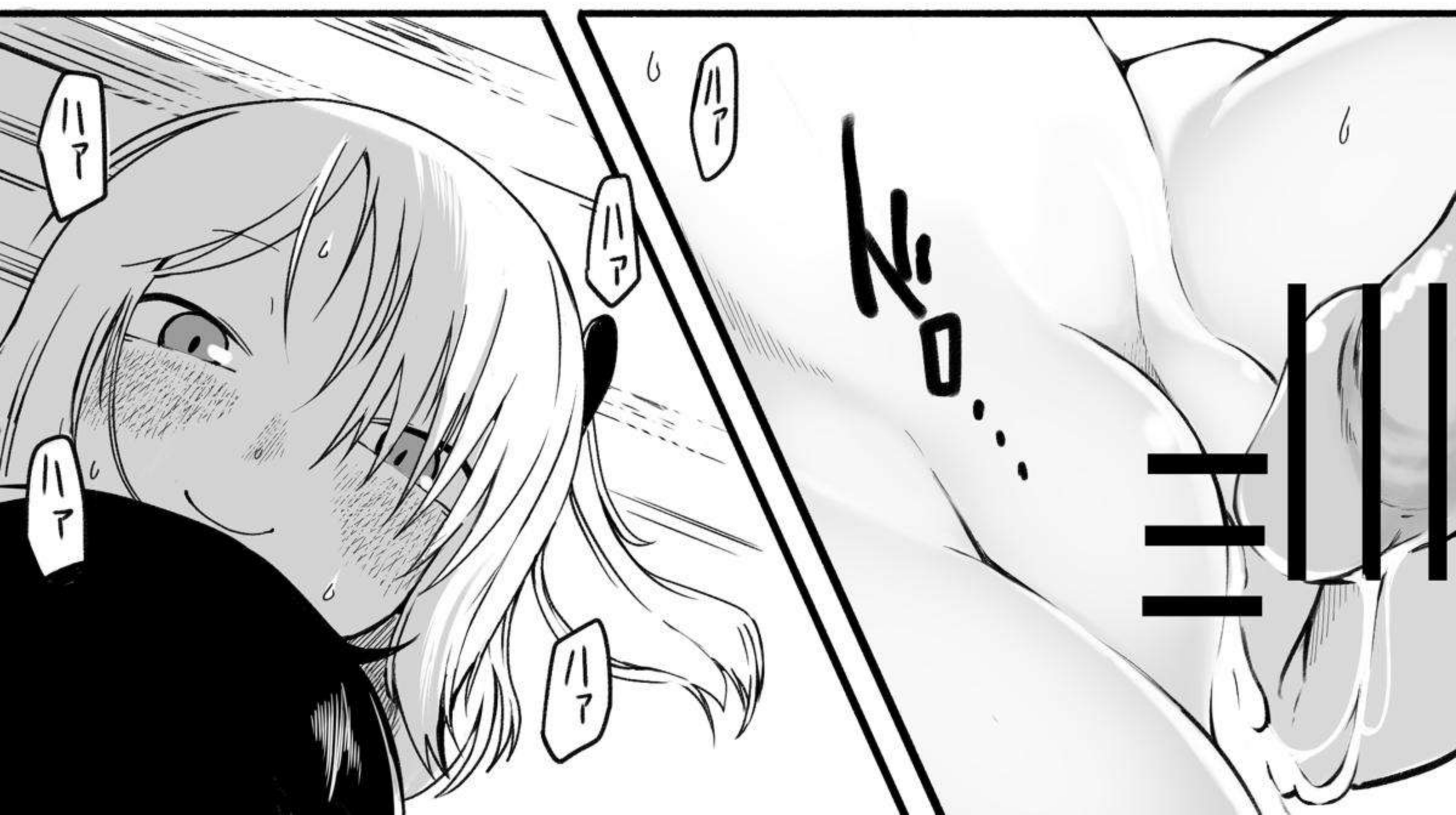
あとはただ
快樂に任せて

ひたすらに互いの
性器をこすり合わせた



そして足の間から
こみ上げる全てを

彼女の中に
吐き出した。





まあまあ
細かいことはいいいからさ

い・い・友・達・で
い・よ・う・よ

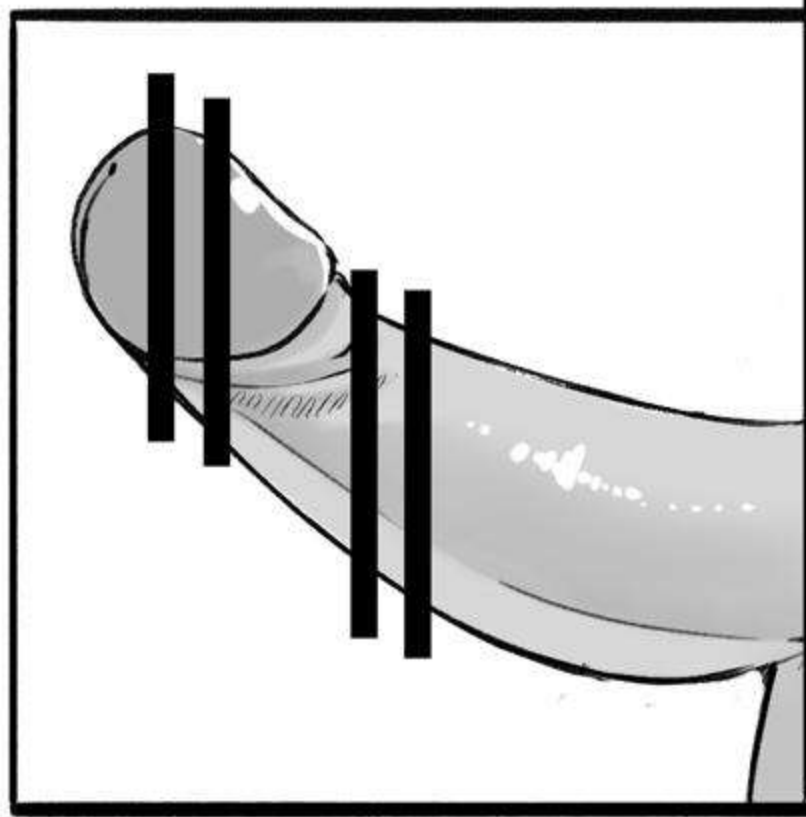
嬉しいけど
ごめんね

その気持ちに
応えられるほど

私が私のこと
好きになれて
ないからさ

え……
それって……





その真意は
よく分からなかったが、
これが失恋と形容できる
ものだと思っていた。
そしてそんな状況でも
肉欲を求めてしまう――



こんな浅ましい僕を
僕は好きになれるだろうか

今はただその答えを
棄ておいて

唯一の友達と
唯一知っている
遊びにふけるのだった

